

登校渋りを呈した思春期男子の遊戯療法

水谷奈保美・松島恭子

Play Therapy for a boy of school refusal in puberty.

NAHOMI MIZUTANI and KYOKO MATSUSHIMA

I. 序論

(1) 小学校高学年という時期

思春期あるいは青年期という言葉がいつ頃を指すのかは一定しておらず、使い分けは曖昧なようである¹⁾。一般に青年期 (adolescence) は「子供から大人への過渡期。およそ12歳頃から22歳頃までの時期」とされている。ブロス²⁾は、青年期を前期 (中学生にあたる)、中期 (高校生にあたる)、後期 (大学生にあたる) の3期に分け、これに先立つ2～3年を前青年期と名付けた。

一方、思春期 (puberty) は「生殖器官が成熟し、第2次性徴が現れ、生殖能力を持つようになる時期。春機発動期」¹⁾とされ、どちらかといえば、身体的、生理的な側面に焦点が置かれているようであるが、これに伴って精神面でも重要な変化が生じることはいうまでもない。

これまで7～12歳頃の児童期は、心身ともに比較的安定した時期といわれていた。例えば、精神分析ではこの時期を「潜伏期 (latency)」と呼び、「小児性欲の衰退期から思春期の始まるまでの時期で、性欲の発達の停止期にあたる」³⁾波風の少ない時期として、精神発達上あまり重要視していない⁴⁾。

しかし、近年、発達加速現象が見られ、声変わりや初潮などの性徴は10歳頃から始まるのが普通になってきた⁵⁾。精神的な変化が大きくなるのは13歳頃であるが、身体発達はそれよりもずっと早くから始まっているのである。このことを考えると、小学校高学年はもはや児童期や潜伏期とはいえず、はっきりとした思春期といわなければならないだろう。ブロス²⁾の区分で言うならば思春期は前青年期、青年前期に一致することになる。さらに、早く思春期に入ることは、それだけ幼児期、児童期が短縮していることを意味し、子どもがそれぞれの時期の発達課題を十分達成できないまま思春期を迎える危険性が増えている⁶⁾とも考えられる。その上、発達加速現象により

子どもの身体的な成熟と精神的な未熟さとのずれ (クレッチマーのいう「発達の非同時性」⁷⁾) が拡大し、この時期の複雑な特徴を生み出すのである。

このようにみえてくると、小学校高学年という時期は、さまざまな危機をはらんだ時期と考えられ、臨床的には児童期というよりも前青年期あるいは思春期の枠組で捉えた方がより理解しやすいのではないかと考えられる。

(2) 思春期の心理と発達課題

この時期の特徴として、まず最初に身体の急激な成長と成熟があげられる。男子の場合、身長伸び、筋肉の発達などの体格の変化、生殖器官の成熟、ひげの発生や変声などの第2次性徴の発現といった形で現れてくる。これらの変化は、身体各部で同じ割合で進むわけではないので、青年は自分の体にぎこちなさやまどいを感じやすい。一方では大人に近づくことの喜びを感じながら、他方では新しい身体イメージを受け入れられず、不安をつのらせるのである⁷⁾。また、身体的な変化に伴う性衝動の昂まりは、青年自身にもコントロールすることが難しく、さまざまな不安や罪悪感、何かもやもやとした感じをおこさせる。この時期の青年の発達課題は、これらの不安と戦いながら、性衝動を支配し、さらに身体の変化を受け入れて、これまでの自分とこれからの自分のアイデンティティを統合、確立することである⁸⁾⁹⁾。

自立という面から考えると青年がいかに親離れしていくかが大きな課題となる。思春期になると、親から離れ大人として自立したいという気持ちが芽生え始めるが、反対に幼い子どものように母のそばで守られていたいという気持ちも同時に持つので、2つの気持ちの間で揺れ動き、深刻な葛藤や不安が生じる場合がある。親に対して甘えていたかと思えば、反抗的な態度や拒否的な態度を取って親を混乱させるのは、このような心理のためである。しかし、自立と依存というアンビバレントは、実

は表裏一体のもので、どちらか一方だけでうまくいくものではない。頼ろうと思えばいつでも頼れるという安心感があればこそ、親から離れて外へ出ていくことが可能になるといえるのである。

青年期の発達には、マラー¹⁰⁾が述べたような乳幼児期における母親からの分離-個体化の過程のくり返し、という側面を持っている。例えばマスターソン¹¹⁾は、この時期を第2の分離-個体化の時期としてとらえている。そして、この過程がうまくいかず、発病に至る場合の病理性について次のように述べている。「幼児が自分から独立していこうとすると、幼児への愛情の供給を断ち切ってしまう母親がいる。この種の母親に育てられると、幼児は第1の分離-個体化期に、個体化へ向かおうとする動きと、母親から見捨てられる不安との間で葛藤状態に陥る。ときにはそれらの抑うつ感や恐怖心や怒りの感情から逃れようとして再び母親にしがみつき、個体化に失敗してしまう。思春期前までは子どもはこれらの見捨てられ感情を防衛するために、分裂や否認などの機制を使ってなんとか社会適応している。しかし、思春期に入って母からの分離独立の要求が強くなってくると、幼児の見捨てられ感情が再現してきて、それに対する防衛が強化される結果、いわゆる境界例症候群が出現してくる。」分裂病の発症も思春期と密接な関連を持つことはよく知られている。ここではその病理について述べることはできないが、乳幼児期に基本的安定感を獲得できなかったものは、思春期の危機を乗り越えることができず発病に至るのではないかという仮説は有力である。

(3) 思春期における心理療法の効用

これまで、思春期危機の特性とその発達課題について述べてきた。思春期という時期は、スタイレイ・ホール¹²⁾が「疾風怒濤の時代」と呼んだように波乱に満ちた時期である。また、アンナ・フロイト¹³⁾によれば「青年期の成長に伴って現れてくる諸特徴は、神経症的、精神的あるいは非社会的な症状形成と酷似しており、境界線状態ともほとんど見分けがつかないほどで」あり、正常な青年でも「一時的」にはそのような状態に陥る危険性のある時期であることがわかる。

一般に、子どもが大人になろうとすると、そこにはいろいろな「つまづき」が存在しているといえる。それが成長へのステップとなるようなことも多い。しかし、本来健康な青年がちょっとしたことでこの時期につまづいた場合、それが意外に長期化したり、深刻な問題へと発展してしまうケースは少なくない。河合¹⁴⁾は「このような「つまづき」に対して、誰が悪いのかを考えるので

なく、これは何を意味しているかを考えるほうがはるかに建設的である」と指摘し、大人が子どもの成長にじっくりつきあいながら、一緒に考えていくことにより、子どもが早く立ち直ることができると述べている。

また、河合¹⁴⁾は「子どもが大人になるためには、子どもによる象徴的な親殺しが必要である」が、「そこには相当な危険性が伴う」こと、「それが意味あるものとなるためには、その死が再生へとつながらねばならない」ことを述べている。

以下に述べる事例は、そのような「つまづき」に対して、治療者が受容的な態度で接し、子どもと成長をともしながらつきあっていく中で、象徴的な「死と再生」を体験し、男性性を獲得していった小学校5年生の男子の遊戯療法過程である。

II. 事例研究

(1) 治療対象

クライアントのプライバシー保護のため、臨床心理学的な意義を損なわない程度に、以下の家族、既往歴その他の情報には若干の変更や省略を施してある。

(1) クライアント

A君。小学校5年生(来談当時)。男子。

(2) 家族

父：祖父の跡を継いで自営業を営む。

母：家の事務手伝いをしている。

姉：中学校2年生。

弟：小学校3年生。

(3) 生育歴

出産予定日より10日早く生まれる。生下時体重2400gで、滅菌室に入れられる。母乳を直接吸う力がなく、母が搾乳して病室まで運び、哺乳ビンで授乳するが、飲む量は少なく、すぐに人口乳に切り替わった。

喘息のため、0歳の頃から通院。夜中に発作の起こることが多く、毛布にくるんで父が抱いて通院したことが多かった。幼稚園の頃、一時、登園を渋ったことがある。

現在は身体の心配は一応落ち着いているが、定期的に通院は継続している。

(4) 主訴

思春期の登校しぶり。小学校5年生の秋、給食に嫌いなものがあり、食べるのが遅いということを契機に登校を渋るようになった。朝、目が覚めても布団から出られない。母がせき立て、自転車の後ろに乗せて、遅刻しながら何とか登校を続けている状態。

(5) Aの問題点

＜これまでのAの母子関係のパターン＞

これまでのAの母子関係は、母が完全にAを包み込んでしまうという、いわば共生的な関係であった。

Aは、「イヤなこと」、「しんどいこと」に直面するとすぐに投げ出してしまふ。つまり、現実の社会の厳しさや、乗り越えていくべき課題へと向かっていくことができず、文字通り、母の安全な懷の中に潜り込んでしまうのである。

一方、母は、そのようなAの態度を表面的には叱ったり嘆いたりするが、いつの間にかそれを容認してしまっているところがある。無意識レベルでは、Aを「抱っこ」してしまひ、子供を保護することで自己愛的な満足を得ている面があるのではないかと、と思われる。

＜思春期を迎えて＞

ところが、小学校高学年になり、中学進学を前にして、「勤勉さ」による高学力獲得への両親や社会からの要求、期待がますます強まってきたこと、急速な身体的成長による「きこちなさ」等が契機となって、今までの母子関係のパターンでは居心地が悪く、うまく適応できなくなってきたようである。

この心理的メカニズムについて考えると、Aの無意識の中では、「安全な母のもとで守られていたい」という気持ちと、一方で、「母に呑み込まれてしまうのではないかと？母のもとから自立したい」という新しく芽生えてきた気持ちとのアンビバレントが生じ始めたものと思われる。これが心のもやもやとなり、Aは「何かおかしいぞ」とどこかで感じていながら、それを意識化できていた。そのために、さまざまなアクティング・アウト（布団から出られない、社会の代表である学校へ行けない、その一方で、母をたたき、「くそパパア！」とのしる、等）という現象が生じてきたものと思われる。

〔2〕治療目標

実際にクライアントの治療を進めるにあたり、クライアントの自我のどのレベルに関わっていくのか、治療の照準をどこに置くのかによって、おのずから治療方法、終結のレベルも異なってくる。そこで、Aの自我レベル及び、治療目標を次に示すことにする。

(1) Aの自我レベル

Aの自我発達のレベルは、「母から自立して外の世界へ踏み出したい」というような自我が芽生え始めたばかりの段階といえる。しかし、Aは、自分でもそのことを意識できない状態であり、「温かく安全な母のもとにいつまでも守られていたい」という気持ちとの非常に不安定なアンビバレントの中にあると考えられる。

(2) 治療方針と目標

ノイマン、E^[3]によれば、「自我が主体性をもって確立してゆく過程において、それをあくまでも自分の胎内にとどめ、呑み込んでおこうとする太母との戦いが経験されなければならない」としているが、Aのこれまでの母子関係のパターン、及び、自我発達のレベルを考えると、Aからいきなり母の庇護を取り去って、自立の方向へと向かわせることは無理と考えられる。

そこで、治療の方針としては、セラピストが、母から分離された治療的な場を設定し、Aを呑み込んでしまうのではなく、Aが安全感を失わない程度の外界からの保護をしながら、Aの内的な成熟を持ちたいと思う。Aが外界へと向かっていける力と自信を自ら獲得し、心理的な母子分離と現実社会への巣立ちを達成していくことを、このプレイセラピーの最終的な目標としたい。

〔3〕治療方法

期間は、198×年12月7日から198×+2年2月6日までの33回。原則的に週1回45分間。大阪市立大学生生活科学部のプレイルームを使用してAと水谷のプレイセラピー、及び、別室で母親カウンセリング（担当：松島）を実施し、プレイのスーパービジョンを松島が行った。

〔4〕治療経過

第1期から第4期に分けて述べる。なお、本文中の略語は次に示すとおりである。

Th	セラピスト（水谷）
Mo	母親
Co	カウンセラー（松島）
p.r.	プレイルーム
T.U.	Time Up
「」	Aの言葉
< >	Thの言葉
⇒	Thが思ったこと。印象。
()	母親面接からの情報、プレイ外での様子、休みなど、補記。

〔第1期 #1～#9〕

#1 198×.12.7

p.r. のドアを開けると自分からさっと入室し、バットで素振りを始める。Moが「こんなところで危ないでしょう」と注意すると、おとなしく止める。パチンコ。うまくいかないと「アカン」という言葉を頻発。独り言のようにブツブツ言うが、Thとの会話はほとんどない。Thは横に座って見ているだけ。パチンコを元の場所にきちんと戻してから野球。Thがうまいと誉めると「だっ

てバットも太いし、こんな誰でもできる」とすぐに否定する。小さな声、語尾も曖昧で聞き取りにくく、会話は続かない。二人でゲームをするが、Thが得点して喜んで途端、ゲームを片付けてしまう。

→Aは神経質で抑えつけられている感じ。自信が無く弱々しいイメージ。ThはMoに対して、指示的で過干渉な母というネガティブな感情転移。＜恐ろしい母や外界から、弱いAを私を守ってあげなければ…＞しかし、Th自身は非指示的受容的態度¹⁶⁾に捕らわれて動けない感じ。

箱庭1。兵士の戦い。右側に緑軍、左側にオレンジ軍を置く。オレンジ軍は、何ひとつ動かないうちに緑軍の戦車をひき殺され、一方的に負けてしまう。Tは「やっぱりすぐ全滅したか。左側が弱すぎる」と言いながらも平然と見ている。戦いのテーマでありながら、極めて淡々とした静かな印象。

→左側(Aの内界)の弱さをThに自己紹介している。

2 12.14

エアガンを組み立てる。家から持って来た紙とマジックで的を作るが、気にいらず、椅子と机を運んできて、その上に箱庭用の怪獣や人形を並べて的にする。ウルトラセブンを狙って撃つと、隣のウルトラの母が倒れる。大きくはっきりした少しきつめの口調で「母が先に倒れてどうすんねん！子供助けもせんと！」

→ドキリとさせられる。Moの助けを必要としている気持ちの表れか。大切なメッセージと受け取る。

弾を全部撃ち終えたところでT、U。紙的は持って帰ろうとするが「やっぱりいいわ、どうせ来週も来るから」と置いて帰る。

3 12.21

野球。二人でマットを倒し、Aが壁に向かって力投。＜すごく速い球投げれるなあ＞「ところが撃たれるねんな」少し野球の話。ボソボソ。続かない。

「よし、やってみよう」とブラレールをつなぎ始める。殆ど口もきかず集中。Thが一緒につなごうとすると「あっ！そうと違う」と拒否する。Thは線路が延びるにつれて邪魔になるものを動かしてやるだけで、あとは横で見守ることにする。難しい二重交差もすぐに諦めず、何度も組み直して、部屋一杯に線路を敷いていく。時間いっぱい使って完成。＜やった！完成やね＞

【3週間冬休み】

4 198×+1.1.11

「やっぱりこれや」ブラレール。自分で邪魔なものを隅に寄せる。前回ほど苦勞せずどんどんつないでいく。ものすごい集中力、エネルギー、重苦しい沈黙。Thは横で見守る。約40分かけてつなぎ終え、5分間電車を走らせる。

〔母親面接より：3学期から、朝登校する時「お母さん早く！遅れるやないか」と急かすようになった。〕

5 1.18

ゴルフ。クラブを2本取り出すがボールが無い。「何かしようと思ったら…」＜何かしようと思ったら？＞「いつも何か足らんか壊れてる。」気のない様子でピンポン球を打つが、急に「そうや！」と顔を輝かせ、砂場の中央に小さな穴を掘り、左の方を柔らかくならす。＜何作ってんの？＞「バンカー」。初めは、少しでも砂が外へこぼれると「あっ、失敗しても一た」と心配そうにThの顔を見るが、その度にThが＜いいよ＞と答えていると、次第に大胆になる。そのうち、砂場の外にも板を並べ、その上にスコップやバケツで砂をバサッバサッとかけていく。バンカーができると、思いきりクラブを振り、砂が部屋中にとび散っても平気。かなり興奮して遊ぶ。

〔母親面接より：朝、再びぐずぐず言い始めたが、Moは「予想していました」と言い切る。〕

6 1.25

沈没作戦ゲーム。二人ともルールを知らない。Thが説明書を読みながら進める。Thが得点すると、Aはルールを無視して強引に勝ってしまう。ダイヤモンドゲーム。今度はAがThにルールを教えてくれ、完全にAがリード。Aの話し方は敬語混じりで、文末をごまかしたような堅い感じ。

→ゲームをしているのにゲームという感じがしない。

Thは自分が一方的に勝たないようにと気を遣う。

〔母親面接より：ぐずぐずしながら「行かない」とは言わなくなる。1限目の終わり10分から授業に出る。〕

7 2.1

トランプ。何のゲームをするかと尋ねると、決めていたかのように「戦争」。Thにルールを説明してゲーム開始。学校でトランプが流行っていることを話す。Aがどんどんリードを取り、生き生きとしている。「この前友達とした時も僕が逆転した。後半に強い。今日はどうか？」その言葉通りAの逆転勝ち。「やっぱり後半強かつ

た」と笑い、サッと片付ける。

⇒初めてゲームをしているという感じがした。すっかりAのペースに乗せられる。

8 2.8

箱庭1で使った戦闘機、戦車などを手に取って見る。
 <久しぶりにやってみる?>ビー玉を砂箱の右下に置く
 が「やっぱりこっちにしよう」と砂場へ。

砂場の左下を底が見えるまでシャベルでどんどん掘り、右上に山を作る。<水使う?>「別にいい」山から左上へ道を通し、そこに新しく深い穴を掘る。穴の中に水車を置き、道を転がしたビー玉で回そうとするが、うまくいかない。「そうや!あの…水使ってもいいですか?」
 <どうぞ>バケツに4杯の水を山の上から一気に流す。蛇口の水で勢い良く水車を回す。

箱庭2。「次はこっちや」今度は砂箱に向かう。真ん中に海を作る。右は緑軍、左はオレンジ軍。海を挟んでの戦い。軍艦、戦車、戦闘機など両軍に同じ位の武器を与える。「ここも水入れていいんですか」<いいよ>海にバケツ一杯の水を流し込む。兵士が撃ち合いを始め、戦車が火を吹き、戦闘機は空中戦をする。激しい戦い。兵士たちは次々に死んでいく。<今日はこっちもなかなか頑張ってるね>「うん」最後は2人の兵士の相討ちに終わる。両軍全滅。

⇒砂場である程度エネルギーを放出した後、卒の小さい箱庭へ。だいぶAの内界が強くなってきた。

9 2.15

Thを待っている間、Moに何かねだり甘えている感じ。
 箱庭3。ロボットと怪獣の戦い。右中央に木を1本立てる。真ん中上方に大型ロボ。「こんな弱っちいからすぐ死ぬけど、まあ置いとこう」と左下隅に青いロボ。やや上方に親子ゴジラ。右にはそれと向かい合うように足を怪我したガメラを置く。左下隅の弱いロボットには援軍を付けるが、大型ロボットの一撃になぎ倒されてしまう。いろんな怪獣やロボットの戦いの後、大型ロボとガメラとの激しい戦いとなり、大型ロボはガメラに吹き飛ばされてしまう。次はいよいよガメラ対親子ゴジラとの戦いというところでT、U。

〔Thの都合、Aの球技大会で2週休み〕

〔第2期 #10~13〕

#10 3.8

球技大会のことを楽しそうに話す。ゲームをした後、将棋1。二人ともルールを知っている程度のレベルで、

対等にやり合う。後半、Aが追い込まれて苦戦。絶体絶命のところでT、U、WCへ（以後習慣となる）。

⇒Thも手加減する余裕はなく、真剣勝負。Tが絶対絶命のところで終わったことがとても気にかかる。

〔母親面接より：自発的に一人で登校したり、月水金の塾通いを始める。〕

#11 3.15

p.r.に向かう時、Moにイーダをしてみせ、MoもAにやり返す。Thが見ているのに気付くと、少し照れる。

「この前は完全に負けてたからな」と将棋の駒を並べる。初めはThが優勢だったがAの逆転勝ち。「どうや!もうどう行っても勝たれへん」ととても嬉しそうな顔をして駒をしまう。

⇒Tの様子を見て安心する。Tの自我は思っていた程弱くないと思う。

〔3週間の春休み〕

#12 4.11

Thの顔を見て、大きなあくびを1つする。いつものようにMoに甘える様子はない。

パチンコやゲームをするが、気が入らない様子。<春休みはどうやった?>「別にこれといって」<塾は?>「楽しくはないけど、まあ、一応は行ってる」将棋3。

⇒身体がひとまわり大きくなり、顔付きも大人びて、ギャングエイジの男の子から、思春期の青年ヘイメージが変わる。元気が無く、堅い感じ。

〔母親面接より：塾の春期講習に早起きして通い通す。クラス替えがあり、担任も男の先生に変わる。Aが遅刻していくことに対しては、先生も友達も理解がある。〕

#13 4.18

買ってもらった菓子を持っている。Moに促され、渋々Thにつくれる。

将棋4。Thの勝ち。将棋の駒を片付けると、少し照れ臭そうにお菓子をつくれる。

⇒思わぬプレゼントに親愛感を感じる。一方、同じ遊びがずっと続いていることの意味を考える。

〔第3期 #14~18〕

#14 4.25

遠足のことを少し話す。マットに向かってノックを始めるが、そのうち「投げてもらえますか?」とThにボールを渡す。Thが軽く投げ、Aが打つ。暫く続けるが、危ないので止める。

赤いボールを出してきて、小声で「やろう」と誘ってくる。バレーボール。＜何回続くかな 1, 2, 3…＞二人とも必死にボールを追いかける。Aが転んだり、Thのスカートのボタンがちぎれたりした熱戦。

⇒Aから「投げて」「やろう」という言葉で誘ってきたのは初めて。心のキャッチボール。

〔母親面接より：4月に入ってから、朝7時に起床、8時までファミコンをして、遅刻せず一人で学校へ行っている。週3回の塾も続けている。面接に来るためにドッチボールクラブを途中で抜けて来なければならず、Moに文句を言い始める。〕

#15 5.2

少し遅れて来所。前回の続きのバレーボール。「そうや！」マットを倒し「僕が飛び込んで取るから投げて」とThにボールを渡す。勢い良く飛び込み、転がる。投げる位置やコントロールに注文を付けて、ますます激しく飛び込んで取る。＜なんか、クラブのしごきみたいやねえ＞次にドッチボール。＜うまいなあ。さすがドッチボールクラブ＞「ドッチの10点ゲームしよう」黒板にマークと名前を書いて点数を付けていく。Aのマークは？→太陽→ボールと次々に変わり、最後は戦士の顔になる。二人とも必死になってボールを投げあう。

〔この回から、Thは体操服に着替えている。〕

#16 5.9

少し遅れて来所。いつもは俯きがちだが、今日は顔に艶があり、生き生きとしている感じ。

赤いボールを持ち、Thの顔を見て目で合図。マットを部屋の中央に立てて、ネットの代わりにする。Aの姿が見えず、声も出さないで、Thは不安で何度もAの様子を見に行く。＜見えへんから難しいね。横にしない？＞「いやこのままがいい」

⇒Aからの終結のサインかと思う反面、この不安は何かと考えさせられる。

〔母親面接より：連休中に友達同士で計画を立てて遠出する。自分たちで昼食も取るなど、ちょっとした冒険であった。〕

#17 5.16

5分遅れて来所。元気がない。ゲームをするが余り気が乗らない様子。ゲーム器を無理にまわしてThをやっつけようとするが、今回は「強引に回し過ぎた」と自分で笑う。

#18 5.23

野球。マットをめがけて何回も投げる。＜やっぱり男の子やなあ。力があるわ＞草野球のことなど話す。小声で聞き取りにくいところもあるが、Thの方を見ながらニコニコと楽しそうに話す。

⇒Thの方を見ながら話すのは初めて。しっかりしたレポートを感じる。

「ボール投げて」Thは下手で暴投ばかり。＜あー、私下手やなあ。どうやって投げたらうまくいくのかなあ＞「まず肩の力を抜いて…」と実演混じりでていねいに教えてくれる。

〔Aの写生会、Moの都合で2週休み。p.r.引越〕

〔第4期 #19～#33〕

#19 6.13

壁に向かってボールを投げながら、Thと楽しく話す。「今度友達同士で、自転車で奈良に行くねん。近くにグラウンドがあるからそこで野球するねん」＜えーっ！自転車で？どれくらいかかるの？＞「4時間くらいかな」＜すごいなあ＞

Thが投げた球がAが打つ。打球が凄い勢いであちこち跳ね回り、何度もThに当たりそうになる。＜当然のように打ってよ。怖いよ～＞とうとうThの足に命中。＜フェーン！痛いよー！シクシク…＞Aは少しすまなそう顔。打球があまり来ない場所をAが教えてくれる。

⇒本当に怖いし、とても痛い。身体を張っている。逃げ出したいような気持ち。どこまで耐えられるか。

ゴルフ。Thにもクラブを渡す。ルールを知っているAがリードを取って始める。Thが打つ番の時「今のうちに漫画読もう」＜アレー、応援してくれへんの？ひどいなあ＞読むのを止めて観戦。バンカーや障害物を作って遊びが発展。

⇒Thは自分も楽しく自由に遊べるようになり、心が流れる感じ。

〔母親面接より：学校へはきちんと行っている。塾へは2/3くらい行っている。Moは塾通いの方も、と欲を出し始める。〕

#20 6.20

「嬉しかった！」といきなり社会見学の話始める。

ゴルフ。砂場に入ったボールを思いきりすくい上げるので、そこらじゅう砂だらけになる。Thが何度も続けて空振りし、二人で笑い転げる。Aはスコアをおまけしてくれる。排水口にソフトボールを詰め「水入れてもらえますか」とバケツを渡す。バケツリレーで水を貯める。

少しゴルフをしてT、U。ボールを取り出し水を抜く。
「あー、おもしろかった！」と満足気に笑って退出。

#21 6.27

〔プレイの前にMoから、Aが塾を止めたことを聞く。〕
「そうや！また水を貯めよう」排水口にボールを詰めて、蛇口に空気入れのホースをつないで水を貯める。勢い良く出る水を真剣な顔付きでじっと見つめる。

⇒Aの横顔を見ていると、何となくドキリとするような深みにはまって行くような恐さを感じる。Moの話が耳から離れず、Aはしんどいやろな、とボンヤリ考えている瞬間がある。ずっしり重いしんどさ。立ちくらみがする。このしんどさはプレイの間中、ずっと続く。横で見守るのが精一杯。

水を貯めた中へ、蛇、蛙、亀、タコなどの下等動物、続いて、怪獣、ロボットを投げ込む。沈むものは「アカン、どうしようもない」と次々取り出していく。

船を浮かべる。船は水の流れに乗ってゆっくり回り出すが、やがて渦に呑み込まれていく。その様子を二人で息を呑んで見守る。

池の手前に緑軍兵士、戦車、大戦艦を並べる。〈誰と戦ってるの？〉「もうすぐわかる」オレンジ軍を向こう岸に並べる。Aは自分の靴が水に浸っていても気付かないほど熱中。〈なんかこっち（緑）強そうやね。戦車とかあって〉「戦車の代わりに」Aは机の上に戦闘機を並べる。〈戦闘機があるんやね〉「うん」いよいよ戦いが始まった時、T、Uとなる。

#22 7.4

いきなりジャンケンで3バンドを始める。汗びっしょり。ダイビングキャッチ。

野球。硬球がすごい勢いで飛んでくるのでとても危ない。〈ひゃー！怖いよ。避難しとこう〉「そんなんやったらこっちに入ってたらいねん！」と強い語調で物置を指す。Thが困ってウロウロしていると、「危ないからこっちにいて」とやさしく言う。Thを避難させて、ノックを続ける。

⇒Aが野球を始めると、いつも恐がって逃げてばかりいたThの態度をずばっと指摘されたようで、どききとする。逆にAに守ってもらって嬉しいような感じでもある。

二人でバレーボールをしてT、U。

外の芝生で男子学生が野球しているのを見て「あれいいなあ」

〔Coの紹介で、男性の家庭教師に週1回来てもらう。

2ヶ月の夏休み。Aは近所のソフトボールチームに入る。〕

#23 9.12

野球をしながらおしゃべり。自転車旅行が中止となったこと、バッティングセンターへ行ったことなど。

キャッチボール。Thは暴投ばかりでAの顔に当たったりする。「10球に1球は受けられへん暴投やな」

⇒ThはAの速球が恐いのを我慢し、必死に目を開けて受けなければいけない。怖い所へ身体を張って出ていった感じ。

〔1ヶ月休みになることを伝え忘れ、電話する。〈大丈夫？〉と聞くと当たり前という感じの答え。Thは拍子抜けした感じ〕

#24 10.17

おしゃべりしながらオセロゲーム。Thの圧勝。「大負けやなあ」と笑う。

ボクシングのグローブを手にして「……がおったらなあ」〈えっ？〉「ううん、友達」

⇒野球、ボクシングなど、Aの求めている男性的、攻撃的な遊びをThが引き受けるには限界がある。女性の私がThとして会う意味は何かと考える。

砂箱に水を入れたタイヤを立てて的にする。ボールが当たると倒れて床が水浸しになるが、あまり気にしていない様子。

#25 10.31

アイスを食べながら漫画を読む。Thは横に座りAの話を聞く。ソフトボール、漫画、修学旅行等。キャッチボール。Thの投げた球がAの急所に当たる。当たったとは言わないが、転がったり飛び跳ねたりして痛がる。

Thにはペナルティーや手加減。しかし、相変わらず強い打球は飛んでくる。

〔母親面接より：以前は朝、Moが起こしに行くところを「うるさい！くそババア！」と怒鳴ってMoを蹴飛ばしていたが、夏頃より「はいはい」とMoをいなすようになった。Aにも余裕が見え始めた。再び、少し遅刻しているが、Moの言葉には、心配しなくても大丈夫という感じがある。〕

#26 11.7

野球、ダイビングキャッチ。Aは勢い良く飛び込んだり転がったりして大喜び。汗びっしょり。〈ちょっと休憩しよう〉マットに並んで腰を降ろす。高飛び、巾跳び

の話。「走り高飛びで1m10cm飛べた。全部1回で飛べたのは僕だけ。足を使うやつにはちょっと自信ある」

⇒自分の力をポジティブに受け止められている感じ。

#27 11.14

高飛び。布積木を積んで、ほうきをバーにする。マットを倒すのをThが手伝おうとすると「そこにおったら危ないからこっち来て」とThをどかせる。高飛びは90cmくらいの高さだが、楽々クリアのところをThに見せる。

台の上に怪獣や車を並べ、ボールで的当てをする。

ラグビーのようなボールの取り合いをするが、どちらからともなくすぐにやめる。

⇒実際に身体が触れ合うわけではないが、なんとなく照れ臭い感じ。

AとThの間にマットを立ててバレーボール。

⇒Aの姿が見えなくても#16のような不安はない。

〔母親面接より：先週くらいから声がかすれ、声変りが始まったようである。〕

#28 11.21

布積木でゴールをつくり、サッカーのPK合戦。Thは1球も受けられない。ドッジボール。ぎゃあぎゃあ言いながら遊ぶ。二人とも汗びっしょり。

〔Aの風邪のため休み〕

#29 12.5

15分遅れて来所。「理科の実験で残っていた。さぼってると思われたらいややから」「まず試したいことがある」Thにグローブを渡し、キャッチャーを頼む。すごく速い球を投げてくる。＜わあ、全然見えへん。受けられへんわ＞と言った途端、ボールがThの胸に命中。かなり痛い。Aは心配そうに走ってきて「ゴメン」。Thを布積木の奥に隠れさせ自分はマットに向かって投げる。後、軽くキャッチボールしながらおしゃべり。

〔12.12は、Moカウンセリングも休みで、Aも「友達と遊ぶほうがいい」というので休み。〕

#30 12.19

〔記録なし〕

〔冬休み。3週休み〕

#31 198×÷2. 1.16

また少しニキビが増えた。何をするでもなく15分くらい話をする。正月に家族でシンガポールへ行ってきたこ

と。父親とキャッチボールをした時の話。「僕が思いきり投げたらすごく速い球投げれてん。バッシーン！って鳴って、お父さん『手が痛いからもうやめる』って言うた」と嬉しそうに話す。＜すごいな。お父さんでも受けられへん球やったら、もうお姉ちゃんには受けられへんね＞Aはマットに向かってピッチング。

#32 1.23

ファミコンのドラゴン・クエストの物語を大きな声で一生涯懸命話す。約30分。その後プラモデルの話。ボール遊び、エアガンなど少しして終わる。

〔Thの都合で休み〕

#33 2.6

最終回。ボール遊び、ゲームなど軽く遊んで終わる。特に印象に残ることはなく、さりげない終わりであった。

治療経過のまとめ

	playの概要	AとThの関係	現実場面での様子
第1期	<ul style="list-style-type: none"> ・箱庭(＃1)で、内界の弱さを自己紹介。 ・エアガン(＃2)「母が先に死んでどうするねん」 ・砂場遊び、プラレール(＃3,4)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Aが黙々と作業を続け、Thが横でそれを見守る。会話はほとんどない。 ・初めは自信がなく、少しの失敗にも「アカン」とすぐ諦めるが、Thが受容の態度を取り続けるうちに、相当大胆なことができるまでになる。 ・Thは、Moに対して「うるさい母親」というnegativeな投影。「私を守ってあげなければ」逆転移。Thは「良い母」の役割を担う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Moに急き立てられ、自転車の後に乗れ、遅刻しながらなんとか登校。 ・朝、起こしにきたMoに「うるさい！クソババア！」と怒鳴ったり、Moを蹴飛ばしたりする。 ・Moと手をつないで寝る。朝、Moに甘えて肩をもんでもらう。
第2期	<ul style="list-style-type: none"> ・4回続けて将棋。真剣勝負でThと向かい合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・AとThが1対1で対決。AはThにいつでも守ってもらわねばならない弱い存在でなくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻しながらも1人で登校を始める。 ・週3回の塾通いを始め、春期講習には早起きして通いとおす。 ・春休みを境に、身体も一回り大きくなり、顔付きも変化。子供から、思春期の男子に。 ・Moへの甘えが少なくなる。 ・クラス替えがあり、担任も50代の男の先生になる。
第3期	<ul style="list-style-type: none"> ・激しいボール遊び。ドッチボール、バレーボール、ダイビングキャッチ、野球など。二人で必死にボールを追いかける。 ・Thとの間にマットを立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Aの方から「やろう」と言葉で誘ってくる。会話は少ないながらも、1つのボールを通して心が通じあっていく感じ。ラポートの形成。 ・Aが球技という形で、Thに直接的な攻撃性を向け始め、Thは保護者の立場に安住していられなくなる。 ・Thは、Aが自分の目の届かない所に行ってしまうと不安になり、何度も様子を見に行かざるを得ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝、7時に起床。1時間ファミコンをした後、学校へ遅れずに1人で行き、塾も休まず続けている。 ・連休には、友達同士で計画を立て、遠くまで遊びに行く。 ・面接に来るために学校のクラブを途中で抜けて来なければならず、Moに文句を言い始める。
第4期	<ul style="list-style-type: none"> ・野球、バレーボール、ドッチボールなどの球技。 ・＃21、渦に呑み込まれるという恐ろしい、象徴的なplay。 ・走り高飛び。 ・ドラゴンクエストの話。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Thとの会話がが増え、ラポートはますます深まる。2人とも心が流れて生き生きと自然な感じ。 ・野球では、AはThに激しい攻撃性を向ける。Thも身体を張って必死に戦う(象徴的な母殺し。Thは「恐ろしい母」の役割を担う)。 ・一方、AはThに手加減したり、やり方を教えたり、危険から庇ったりもする。保護する者とされる者が逆転(Thは「捕らわれの女性」の役割を担う)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソフトボールチームに入り、毎日曜日、朝から練習に行く。 ・塾を止め、夏休みから男子大学生の家庭教師に来てもらう(Mo本人の希望によりCoが紹介)。 ・学校へは、ぐずぐず言いながらも8:45迄には登校。 ・Moに対して余裕のある態度や思いやりの態度を見せ始める。朝起こしにきた母を「はいはい」といやすようになる。

Ⅲ. 考 察

先にも述べたように、Aの抱えていた問題は、共生的な母子関係と未熟な自我発達にあったと思われる。

#2で、ウルトラの母に向かって投げかけられた「母が先に死んでどうすんねん！子供助けもせん」という言葉は、Aの抱えていた問題点を見事に表しているのではないだろうか。

ここでは、Aがどのような心理的成長のプロセスを歩んでいったのか、Aとセラピストの治療的人間関係に焦点を当てて考えていくことにする。

〔第1期〕

Aは、#1の箱庭1で内界の弱さを自己紹介した後、#3、4のプラレールや、#5の砂場の掘起こしでは、相当の心的エネルギーを使って黙々と自分の作業を続けた。セラピストは、その横にいてAの仕事をじっと見守り続けた。

セラピストは、意識レベルでは、非指示的受容的な治療態度を取ることに縛られて、Aに働きかけていくことができないでいた。その反面、無意識レベルでは、Aの母に対して「指示的で過干渉な母親」というネガティブなイメージを投影し、「Aの抑圧された感情をプレイの中で解放させてあげたい。弱いAを私が守ってあげなければ」という強い逆転移を起こしてしまう。ここでセラピストは、最初の治療目標から外れて、母親と同じようにAを「抱っこ」し相当呑み込んでしまっていたと言わざるを得ない。

マリオ＝ヤコービ¹⁷⁾は、「分析家が自らの無意識の内容を患者に投影すると大変な結果につながることもある」と逆転移の危険性を指摘しながらも、「分析家が逆転移に巻き込まれるのを完全に防ぐことはできない」とし、「分析家が持たねばならぬ最も重要な資質は自然な心の流れを中断することなく、自分の見解、反応、感情、情緒や思考を、場面の展開に応じてくり返しチェックできる柔軟性である」と述べている。また、逆に「患者が真に私を必要とするかに見えるところへ私を連れていくのに身を任せることができた場合、そこから感性豊かな新しい洞察の自然に現れるのを再三再四見てきた」と逆転移の効用についても述べている。

本セラピーの場合にも、セラピストは相当強い「転移－逆転移関係」に巻き込まれたが、そのことによってセラピストは、Aの無意識の世界に関わっていくことができたのではないか、と思われる。

結果的にみれば、Aは、厳しい外界から守られた、セ

ラピストの絶対的受容の場において、母親への甘えを象徴的に体験しながら、思う存分、内界の掘り起こしとカタルシスを行うことができたのではないと思われる。この仕事を通じて、Aは少しずつ自分への自信と外界へと向かう力を蓄え始めたと考えられる。

〔第2期〕

第1期では、「Aが黙々と仕事をするのをセラピストが横で見守る」という図式であったのが、第2期では、将棋を通して、Aはセラピストを1人の対等な相手と見なすようになる（#10～13）。

始めセラピストは、Aが「勝負に負ける」ことで、今までに少しずつ蓄えてきた自信と力を再び失いはしないかと非常に心配するのだが（#10）、Aの様子を見ているうちにAがもはや「いつでも庇ってやらなければならない弱い存在」ではなく、セラピストと1対1で向い合えるだけの力ができてきたことを感じる（#11）。そして、Aに対する信頼感、安心感が増すとともに、共生的な関係を脱して、お互いに独自の自我をもった存在として認め、動き始めることができるようになる。このような心理的な変化に伴い、Aの身体面での成長、特に子どもから青年へとイメージが変わってきたことは、たいへん興味深いことである。

〔第3期〕

Aの方から遊びに誘ってくるが多くなり、会話は少ないながらも、1つのボールを媒介として、お互いの心が通じ合っていくのがわかり、レポートが完成する。セラピストは、随分安心してAの活動を見ていられるようになったが、Aがドッジボールなどの形でセラピストに直接的な攻撃性に向け始めたため、保護者の立場に安住していられなくなってきた。

そんな中で、#16の「セラピストとの間にマットを立てる」というプレイが現れる。現実場面では、遅れずに1人で登校できるなど、現実適応は十分クリアできてきた為、プレイの中での様子も考え合わせて、終結の予告と捉えてよいのではないか、という思いをセラピストは意識レベルで持った。しかし同時に、無意識レベルでは、プレイの中で、姿の見えないAの様子を何度も見に行かざるを得ない心境にさせられていた。このセラピストの不安は何だったのかを考察することが第3期のポイントと思われる。

セラピストは、Aの自立心の成長、外界への探索行動を喜ばしい思いながらも、つまり、ノイマン¹⁸⁾のいうところの「広がりつつある好奇心と発達していこうとす

る自我の喜ばしい傾向」を受け入れながらも、セラピストの目の届かないところへAが出ていくことには、不安と戸惑いを感じていた。まだ、安心してAを手離すことができる段階にはないと言えるだろう。

この「不安を感じる」段階は、通常の母子関係の中でも現れる段階であり、改めて、セラピストが、Aとの疑似母子関係を演じさせられていたことに気付かされた。

〔第4期〕

セラピストは、自分の心が自然に流れ、今までになく自由にAに関われるようになる。このようなセラピストの変化、成長に伴い、Aの方でも心が生き生きと流れ出した感じで、セラピストとの会話も増え、ラポートはますます確固としたものになる。

#21では、「渦に呑み込まれていく船をセラピストと一緒にじっと見守る」という、非常に象徴性の高いプレイが現れる。

渦の象徴性について、河合¹⁹⁾は「何ものをも吸い込んでしまう深淵としての意義が大きいが、神話においては、地なる母の子宮の象徴であり、すべてのものを生み出す豊穡の地として、あるいは、すべてのものを呑みつくす死の国への入口として、常に全人類に共通のイメージとして現れるものである」と述べている。これは、まさに太母の両面性を表すものである。

ノイマンによれば、「母なるもの」「太母」のイメージには、産み、育て、与え、包み込む、良い母親の側面と、つかんで放さず、呑み込み、破壊する、悪い母親、恐ろしい母親の側面の両方がある。乳幼児期には前者の良い母のイメージが強いが、思春期になり、「男性がもはや至福と乳を与える良き母に乳幼児—幼児的に依存せず」、内的な自己衝動によって必然的に母から分離、自立していこうとする時には、後者の恐ろしい母のイメージが強く感じられるのである。

「子どもが大人になるためには子どもによる象徴的な親殺しが必要である」ことはすでに述べたが、この時期の男の子がいかに母親から自立していくかを象徴的に描いたものに「英雄神話」¹⁹⁾がある。英雄神話というのは、「英雄が囚われの女性を救い出すために恐ろしい竜との戦いに挑み、苦難の末、最後には竜を打ち負かして、その女性を見事に救出し、妻にする」というモチーフのものである。この神話において、「竜」は呑み込もうとする恐ろしい母を表し、「囚われの女性」は、文字通りには現実の女性との関係と取ることもできるが、もっと超個人的な解釈では「新しい何か」「内的なもの」「こころ」を表しているとも考えられる。つまり、「竜との戦

い」は思春期儀礼なのであり、恐ろしい母の元型を殺すことにより、男性性を発達させ、新しい「こころ」を得て、自分の人生を歩み始めることができるのである。

このプレイで現れた渦は、Aを呑み込もうとする太母の象徴であったと思われる。Aはこの危険で恐ろしい体験を、セラピストが立ちくらみを起こすほどのしんどさで見守る中、ぎりぎりのところで、無事乗り切ったと言えるだろう。このことによって、Aは新たな力を得て、大きく成長することになったと思われる。

毎回のように行われた野球では、Aの成長が違った形で現れてきた。始めのうちセラピストは、ボールが当たるのを恐れて横で見ているだけだったが、Aに引っ張られて、自分もクローブをはめることになってしまう。それまで保護者的な、いうなれば「母なるもの」の役割を演じさせられていたセラピストは、そのときAとの本当の対決を迫られたことになる。「母なるもの」とか「セラピストというもの」といった役割を背負った大人としてではなく、「ひとりの人間」としてのあり方を求められたように思われる。セラピストもこの戦いの中に必死に身体を張って飛び込んでいった思いであった。この戦いを通して、Aは象徴的に「母殺し」を成し遂げたのである。

ところが、この戦いの中、Aはセラピストに対して攻撃するばかりではなく、反対に、手加減したり、危険から庇ったりし始める。保護する者と保護される者の立場が完全に逆転してしまったのである。その時のセラピストは、Aに守られていることが何となく嬉しいような心持ちでもあり、「母なるもの」から今度は「囚われの女性」になっていたようである。Aは「弱い女性を守り、いたわる」という経験を通して、英雄としての男性性を成長させていったのだと考えられる。一人の女性に対して「元母」と「囚われの女性」が投影され、混乱した感じがするが、この点についてノイマン¹⁹⁾は、「男性が女性に対して抱く原恐怖」という概念で説明している。この原恐怖というのは、呑み込む恐ろしい母のイメージであるが、「英雄によって女性の恐ろしい面のみが殺されるならば、女性（アニメ）は解放され、それとともに彼女の至福を与える多産な面も解放され、この良い面によって彼女は男性と結合する。」

ちょうどこの頃、Aは現実場面でも、朝起こしにきた母に対して、以前のように蹴飛ばしたり、ののしったりしなくなり、余裕のある態度を取り始めている。

また、夏休みより、カウンセラーの紹介でAの家庭教師をしている男子学生もまた、「渦から立ち上がっていく力を持つものとしての男性性モデル」として、Aに大

きな影響を与えたであろうと思われる。

最後にここまでのAの心理的成長の過程を振り返ってみることにする。第1期で、セラピストの絶対的受容と保護のもとで、思う存分内界の掘起こしとカタルシスを行ったAは、第2期では、セラピストと1対1で向かい合えるようになり、第3期では、現実世界へと向かう力と自分自身への自信を相当高いレベルまで獲得し、現実レベルでの適応は、十分できるまでに成長したといえる。第4期では英雄神話に象徴されるような「母殺し」「囚われの女性（アニマ）の獲得」を通して、母子分離を達成することができたと思われる。そのことを考えると、#21での恐ろしい渦の体験は、本プレイの意味を確認する上でも非常に意味深い、重要なものであったと思われる。また、#32で、Aが30分もかけてセラピストに一生懸命語ってくれた「ドラゴンクエスト」のストーリーは、今にして思えば、他でもない「英雄物語」だったのである。

今回、このような形でまとめることを承諾してくださったクライアントに深く感謝します。

文献

- 1) 馬場謙一：青年期とは何か 精神分析からみた青年期，馬場謙一他編：青年期の深層，有斐閣（1987）
- 2) Blos, P. 野沢栄司訳：青年期の精神医学，誠信書房（1971）
- 3) Laplanche, J.&Pontalis, J.B. 村上仁監訳：精神分析用語辞典，みすず書房（1977）
- 4) 山中康裕：児童期，異常心理学講座3
- 5) 西村州衛男：思春期の心理—自我体験の考察—，中井久夫・山中康裕編：思春期の精神病理と治療，岩崎学術出版（1987）
- 6) 加藤隆勝：青年期の意識構造，誠信書房（1987）
- 7) Bardara M. Newman and Philip R. Newman 福富護他訳：生涯発達心理学，川島書店（1975）
- 8) 福島章：思春期のアイデンティティ，大原健士郎編集：子供の心理2 思春期の心理と精神病理，至文堂（1979）
- 9) 岡堂哲雄：意識構造の形成，大原健士郎編集：子供の心理2 思春期の心理と精神病理，至文堂（1979）
- 10) Mahler, M.S. 高橋・織田・浜畑訳：乳幼児の心理的誕生—母子共生と固体化，黎明書房（1981）
- 11) Masterson, J.F. 成田善弘・笠原嘉訳：青年期境界例の治療，金剛出版（1979）
- 12) Hall, G.S. : Adolescence, Appleton, New York. (1940)
- 13) Frewd A. : Adolescence, Psychoanalytic Study of the Child, 13, 255-278 (1958)
- 14) 河合隼雄：大人になることのむずかしさ—青年期の問題，岩波書店（1983）
- 15) Neumann, E. 林道義訳：意識の起源史，紀伊國屋書店（1984）
- 16) Axline, V.M. 小林治夫訳：遊戯療法，岩崎学術出版社（1972）
- 17) Jacoby, M. 氏原寛他訳：分析の人間関係，創元社（1984）
- 18) Neumann, E. : THE CHILD. Structure and Dynamics of Nascent Personality, Harper and Row
- 19) 河合隼雄：ユング心理学入門，培風館（1967）

参考文献

- ① 高頭忠明：青年期，異常心理学講座3
- ② 笠原嘉：今日の青年期精神病理像，笠原嘉他編：青年の精神病理，弘文堂（1976）
- ③ 橋本雅雄：過保護とは，臨床社会心理学1 自律と依存，

（平成3年10月11日受理）

Summary

This case study reported a process of the play therapy for a eleven-aged boy (A) who refused the school.

He grew up over protected by his mother because of his asthma. In puberty, he had the conflict between two feelings; one was the hope to be contained by his mother forever, the other was the fear to be swallowed by his mother and the desire for the independent from her. We assumed that this conflict caused his acting-outs.

The process of the play therapy was divided into four stages from a point of the therapeutic relationship between A and the therapist.

In the first stage, he played in silence in the situation of the acceptance and protect by the therapist. He had gradually enforced self-confidence. In the second stage, he became to oppose to the therapist. In the third stage, the rapport became intimately through the ball game. The therapist watched over him considerably with relieved. But when he could not be seen, the therapist became anxious, which was the therapist's counter-transferance. In the forth stage, he directed the sever aggression to the therapist in the baseball game. The therapist tried to oppose him, but could not win him. It was thought that he completed to kill his terrible mother (the therapist) symbolically. On the other hand, he began to protect and save the therapist from the dangerous. That is, the therapist was not the terrible mother but a dependent woman. Through this experience he had gained the male sexuality.

This process is discussed by the theme of "The Mith of Hero" which was the initiation in puberty.